

私の研究



VUCA の時代だからこそ、生涯学習を！ ～私が「それでいいんですか？」と問う理由～

三瓶 千香子 (さんぺい ちかこ)

桜の聖母短期大学 キャリア教養学科 教授
桜の聖母生涯学習センター長



1. はじめに

私は、社会教育・生涯学習という分野を専門としています。そして私が主として研究対象としているのは、「おとな」なのです。「おとなが学ぶことって何だろう？」ということテーマに、ずっと追いかけているといってもいいかもしれません。さらに「おとなの学びと地域活性をどう結び付ければいいのかだろう？」ということが、問題意識に上乗せされています。

ところで読者の皆さんは新型コロナ禍で、何か新しいことに挑戦したり取り組んだりしましたか？

内閣府は2020年から、感染症の影響下における人々の生活意識・行動の変化の調査をしています。最新の調査（2021年11月1日）¹の「挑戦・取組」に関して、「教育・学習（新しい分野、技術、語

学等）に新たに取り組んだ」の回答は、全体平均7.3%、20歳代では15.5%ですが、50歳代になると3.3%、60歳以上になるともっと下がって2.1%となっています。ほかの結果も見てみましょう。「ビジネス関係の学習（資格取得、スキルアップ、転職情報収集等）に新たに取り組んだ」人は、全体では6.7%、20歳代は12.2%ですが、50歳代では3.6%、60歳代以上では0.9%となっています。この2つの項目だけでは断言できませんが、どうやら年齢を重ねるごとに実際に「新しい学び」へのチャレンジ率は下がってきているようです。特に60歳代以上ともなれば、「仕事もそろそろ定年を迎えるし、新しい知識を注入する必要なんてないし…」なんていう意識や声がこの調査データから見え隠れしていることが分かります。

2. VUCA 時代だからこそ生涯学習が意味を持つ

生涯学習には、“Self-Directed Learning”（自己管理学習）という原則があります。簡単にいえば、誰かに強制されない学びということです。この概念で重要なキーワードは2つ。それは「自分で」と「他人と」というものです。生涯学習とは、学習者自身が学習目的を認識して、日々の学習計画や学習内容、場所、学習支援を受ける場所なども「自分で」決定するということです。しかし、これは個人が孤立して学習を進めるということを意味しません。「他人と」共に相互作用しつつ、多様な支援と学習資源を利用しながら行う学習を指します。

さて、ここで「生涯学習は強制されない学習であるのだから、学びたい人は学ばばいい。自分には関係ない」という声が聞こえてきそうです。私は生涯学習推進者の立場から、「本当にそれでいいんですか？」とお節介な質問をしています。

新型コロナ禍になる前から、「VUCA の時代」という言葉が注目されてきました。これは変動性（Volatility）・不確実性（Uncertainty）・複雑性（Complexity）・曖昧性（Ambiguity）が高く、未来が予測しにくい時代の到来を示しているものです。例えば新型コロナ禍の終息も見えない中で、ロシアのウクライナに対する軍事侵攻は世界を大きく揺るがしています。まさに私たちは VUCA の真ただ中に生きています。

さらに人工知能（AI）・ビッグデータ・IoT・ロボティクス等の先端技術の高度化によって、私たちの生活は便利で快適になる一方で、知識の陳腐化と相対的価値の低下が予想以上に速いため、知識を持っている者と持たざる者の格差が広がる可能性が非常に高いのは容易に想像できるのではないでしょうか。だからこそ、常に性別や年齢を

問わず、幅広い知識と柔軟な思考力を更新しつづける生涯学習が今まで以上に必須になるのではないかと思います。

3. 桜の聖母生涯学習センターの多様な取り組み ～地域と短大の“接続詞”～

では、このような時代において高等教育機関は地域のみなさんに何ができるのでしょうか。

大学には教育・研究・社会貢献という3つのミッションがあります。3つ目の社会貢献の形は多様ですが、大学が有する人的、物的、知的資源や集積されている教育研究機能を広く社会に提供・還元することもその一つでしょう。

私が籍を置く桜の聖母生涯学習センターは、短期大学と地域のみなさんとの双方向のかかわりを創るコーディネーターの役割を担っています。短大がこれまで蓄積してきた多様な知的・人的資源を地域にいかに開放できるか、結びつけられるかを念頭に置きながら、常に知の源泉の探究機会、習得機会の企画をしています。もっとストレートな表現をするなら、「VUCA 時代と人生100年時代に生きている私たちには、不断の知の更新が必要になりますよ。だから学び続けませんか」というメッセージを伝える“生涯学習のきっかけづくり屋”なのです。

桜の聖母生涯学習センターの取り組みは、①開放講座②地域連携講座③本学独自の履修証明プログラム④産官学連携プラットフォーム事業の4つに整理できます。

①は、年間150以上の講座を企画し、地域の学習者のみなさんを「迎え入れる」スタイルです。②は、研修内容の相談に対応し自治体や企業への講師派遣の窓口機能です。地域へ「出向く」という学外拡張型といってもいいでしょう。③は、生涯学習センターの開放講座と桜の聖母短期大学の

正規課程科目の組み合わせの体系的な授業を一定数の時間以上を学修すれば、学長名の履修証明書を取得できるという制度です。④は、「福島市産官学連携プラットフォーム事業」²の「人生100年時代学び直しチーム」の座長役を担っています。福島市全域規模の産官学と地域住民を巻き込んで、「人々の学習ニーズはどこにあるか」を常に模索できる連携のハブ的役割を果たしています。

以上①～④の中で、今最も注力しているのが③「履修証明プログラム」（「桜おとなカレッジ：Sakura Otona College／通称SOC^{ソック}」と名付けられています）です。一般的には一定数の時間を学修したかどうかにかに力点を置かれる制度ですが、SOCは異なります。「短大の正規課程の体系的な授業を受けてみたい」「若い学生たちと共に学んで、多様な学び方と価値観に触れてみたい」という地域の方々の知的意欲の声を反映して始められた取り組みで、体系的・高次な学びの提供と異齡共学に軸足を置いています。

ところで、みなさんは学びから脱落したことはあるでしょうか。「よし、今年は絶対英会話レッスンを続けるぞ」「この資格を取得するぞ」と決めたのに、いつの間にか中断してしまったという経験はないでしょうか。

ここで注目したいのは、「学習仲間の存在」です。内閣府の「平成30年度 生涯学習に関する世論調査」によれば、「学習しない理由」のうち「一緒に学習する仲間がいない」が2.4%を占めています³。また令和2年度に21歳以上の社会人が短期大学へ入学した割合はわずか6.2%なのです⁴。この数値から読み取れることは、社会人にとって学習仲間の存在は高等教育機関へ踏み込む勇気や学習継続に大きく影響するということです。社会人学習者は交流ニーズが高く、相互学習を行うことによって学習効果の向上が期待できるといわれ



グループワークで意見をアウトプット



2020年には、農業と学業を両立した男性が履修証明プログラム第1号となった

ています。そこで桜の聖母生涯学習センターでは、SOCメンバー同士の新たなコミュニティ開発や学習継続の支援に力を入れています。

4. 「変身資産」の重要性

VUCAの時代であり、人生100年時代に突入した今、そして新型コロナ禍によって皮肉にも社会のパラダイムが急激に変化した今、私が最も注目している概念があります。

それは組織論学者のリンダ・グラットンが著した『ライフ・シフト』⁵の「変身資産」という概念です。グラットンは、生きがいのある幸福な人生を送る条件の研究を踏まえた上で、お金に換算で

きない要素を「無形の資産」と定義し、さらに「生産性資産」「活力資産」「変身資産」と3つにカテゴライズしています。そのなかの「変身資産」とは「人生の途中で変化と新しいステージの移行を成功させる意志と能力」を表すのですが、この資産を増やすための重要要素に「新しい経験に対する開かれた姿勢」を挙げているのです。

新型コロナ禍を契機として「新しい日常（ニュー・ノーマル）」が私たちの社会を構成しつつありま

す。これは従来の方法や形式すなわちマンネリを疑う力そして新しい日常に適応する力が問われているということではないでしょうか。

「生涯学習は強制されない学習であるのだから、学びたい人は学ばばいい。自分には関係ない」という声に、「本当にそれでいいんですか？」と私はこれからも、生涯学習推進者としてVUCAを生きる一人としてお尋ねし続けていきたいと思えます。

- 1 内閣府「第4回 新型コロナウイルス感染症の影響下における 生活意識・行動の変化に関する調査」（令和3年11月1日）https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result4_covid.pdf（最終閲覧日：2022年3月26日）
- 2 この事業の位置づけや詳細については、本誌前号に本学の西内学長が紹介しています。
- 3 内閣府「平成30年度 生涯学習に関する世論調査」<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gakushu/zh/z04.html>（最終閲覧日：2022年3月20日）
- 4 短期大学の一般的な修学期間を18歳～20歳と考え、21歳以上を社会人学習者としてカウントした。短期大学入学者総数49,495人のうち21歳以上の入学者数は3,081人である。「短期大学の年齢別入学者数」文部科学省「令和2年度学校基本調査 調査結果の概要（高等教育機関）」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001148386&tclass2=000001148387&tclass3=000001148388&tclass4=000001148391&tclass5val=0>（最終閲覧日：2022年3月19日）
- 5 リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット『LIFE SHIFT（ライフ・シフト）』東洋経済新報社、2018年。グラットンは来るべき超長寿社会に対し、既存の「教育→仕事→引退」の3ステージの順に同世代が一斉行進する時代は終焉に向かい、多くの人が生涯で転身を重ね、複数のキャリアを持つ「マルチステージ」の人生を送ることになるであろうと示唆している。『LIFE SHIFT2』（2021年）では、これからの社会と多様な生き方についてさらに詳しく言及している。

<プロフィール>

1974年郡山市生まれ。1993年安積女子高等学校卒業、1998年上智大学文学部教育学科卒業、2000年上智大学大学院文学研究科博士課程前期（教育学）修了。

文部科学省第8期中央教育審議会生涯学習分科会学習成果活用部会専門委員、福島県生涯学習審議会委員、南相馬市教育振興基本計画策定会議委員、郡山市教育振興基本計画審議会委員などを歴任。現在は、全日本大学開放推進機構監事、日本青年館評議員、KFB 福島放送番組審議会委員、福島県立図書館協議会委員、福島市国際交流協会理事など。

共著に『よくわかる生涯学習』（ミネルヴァ書房）、『大学はコミュニティの知の拠点となれるか』（ミネルヴァ書房）がある。（後者に所収されている論文は、日本カトリック短期大学連盟学術研究奨励賞受賞。）